

# 宮城県南三陸町でのフィールドワークをふりかえって

## －大正大学人間環境学科の取り組み

本田裕子<sup>1</sup>・高橋正弘<sup>2</sup>

1：人間環境学科 准教授

専門分野：環境社会学、野生生物保護

2：人間環境学科 教授

専門分野：環境教育、意識啓発

キーワード：宮城県南三陸町、フィールドワーク、東日本大震災、大正大学人間環境学科

## 1. はじめに

大正大学人間環境学科では前身の環境コミュニティコースであった2013年度より宮城県南三陸町での実習（以降、フィールドワークと表記）をカリキュラムとして位置づけ行ってきた。新型コロナウイルスの影響による2020年を除いて、計8回のフィールドワークを南三陸町で行ってきた<sup>1)</sup>。

2011年3月11日に日本を襲った東日本大震災による南三陸町内の人的被害は、死者620人（直接死600人（うち町民551人、町外の方48人、不明1人）、間接死20人）、行方不明者211人（うち町民210人）である。震災前の人口は17,666人（2011年2月末時点の住民基本台帳人口）であったが、現在は12,218人（2021年12月末時点の住民基本台帳人口）に減少している（以上、南三陸町HPより）。

フィールドワークでは2013年度は3年生を対象とし、その後1年生が対象となった年度もあったが、おおむね2年生を対象に夏季休暇中の7月あるいは9月に実施してきた。人間環境学科は2020年度より公共政策学科に改組されたため、本来であれば2020年度の間環境学科2年生を対象にしたフィールドワークが最後のフィールドワークであった。しかし新型コロナウイルスの感染拡大により実施が延期となり、彼らが3年生となった2021年12月17日～20日に実施することとした<sup>2)</sup>。

本報告では、人間環境学科の南三陸町でのフィールドワークがどのようなものであったかを記録しておくことを目的に、南三陸町でのフィールドワークの概要を整理し、学生たちの震災・復興への理解を深めることを企図した学習プログラムについて、その意義を整理する。なお、このフィールドワークは「フィールドワークⅡ」という科目（2単位）により行われてきたものであり、事前学習・事後学習が必須であった。本報告でも、事前学習・実習・事後学習の3つに分けて整理する。

## 2. 事前学習

事前学習は、大きく2つの学習プログラムに分けられる。まず、視写である。

具体的には、東日本大震災を題材に扱った小説である、『希望の地図』(重松清著)を精読することである。その学習にあたって、視写という作業を課した。視写とは、いわば写経のように書かれている文章をそのまま書き写すことである。例えば池田(2011)は、視写を「〈からだ〉に読み書きさせる」とし、学問するための基礎体力を養う教育手法として評価する。

視写では、『希望の地図』を99のパートに分けて、それを各自で用意した原稿用紙に書き写していく作業を課した。1パート書き写すのにおよそ30分かかる。2年生が全員履修することになっている、春学期の演習科目「ワークショップⅢ」の初回ガイダンスにて、この視写の作業について説明し、春学期終了前の7月中下旬を締め切りを設定した。これはフィールドワークの事前学習でもあるので、授業時間を使うのではなく、各自が自宅等での自習として行うものである。そのため、早い学生では5月中旬に終わらせて提出する者も現れる。

視写は日ごろPCやスマホで文字入力をしている学生にとって大変な労力が必要で苦痛を感じさせる作業となるようで、作業開始当初は不満を言う学生も多かった。そのため、視写作業の意図をきちんと説明する必要があった。南三陸町でのフィールドワークは楽しい研修旅行などではなく、被災の現場を目の当たりにし、被災者の方々の話に向うことが主眼にある。そのため、震災に関する文章を一文字一文字丁寧に書き写すことで、少しでも被災者の方々の思いを共有し、被災者の苦痛を理解する必要がある。実際にフィールドワークを終えた学生からは「視写をしてから現地を訪問してよかった」とする意見が毎年複数聞かれたし、当初は手書きに慣れず、力を入れすぎため作業がつかかったが、慣れていくと、必要以上に力をかけずに書けるようになり、作業が楽になったという意見も聞かれた。

全員が視写作業を終えた段階(図1)で、グループワークを実施し、『希望の地図』のどの場面が印象に残ったかを話し合う学習を「ワークショップⅢ」内で設けた。そこでは、学生自身が震災当日にどこで何をしていたかを切り口に、震災当時の記憶も思い出させ、グループ内で共有することで、震災を学ぶ・考えるという意欲を高めるよう工夫した(図2)。また、筆者のうち高橋は震災直後にボランティアとして南三陸町で活動した経験をもつため、当時の南三陸町の様子やボランティア活動当時の感想を学生たちに話すことも併せて行った。

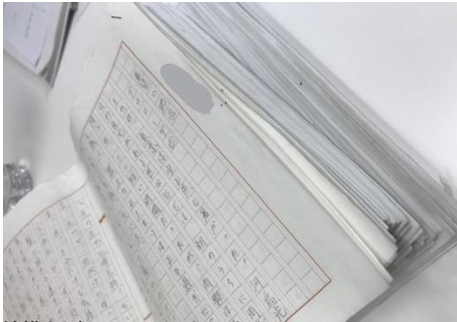


図1 視写された原稿用紙の束  
(2020年3月26日筆者撮影)



図2 事前学習のグループワーク  
(2015年7月14日筆者撮影)

次の段階として映像学習を行った。震災に関連する映像として、「ラジオ」(NHK 特集ドラマ、一色伸幸脚本、2012年放送)と「証言記録 東日本大震災 第14回 宮城県南三陸町～高台の学校を襲った津波～」(NHK、2013年放送)を教材として利用した。

「ラジオ」は、震災10か月後の宮城県女川町のコミュニティラジオを舞台に女子高生とその周囲の人々が震災とどう向き合っているのかを取り上げた実話を題材にしたドラマであり、震災からおおよそ1年後の日本の当時の様子(例えば、原発事故による震災廃棄物の放射能をめぐる風評被害等)がよく描かれている。フィールドワークは、単に震災のことを学ぶだけでなく、震災が発生した社会に着目するものでもある。そのため市民はどのように震災と向き合うべきか、生じている課題も含めて、震災後の問題を社会問題として捉えることが求められる。当時の日本の社会や被災地が抱える課題を知ることができる教材として、当該映像作品を視聴する機会を設定した。

「証言記録 東日本大震災 第14回 宮城県南三陸町～高台の学校を襲った津波～」は、南三陸町での被害を学ぶ目的で取り上げたものである。映像では、フィールドワークで訪れる旧戸倉中学校が取り上げられている。高台にある旧戸倉中学校は指定避難所であったが、津波で複数人犠牲となった場所である。この中学校でどのような出来事が起きたのか、映像では住民、中学生が当日を語る場面があり、学生たちはフィールドワークで訪れる南三陸町での津波被害の実態を理解し、人々の思いをくみ取ることができるものである。実際に旧戸倉中学校を訪

問した際に、映像に出てくる人々が避難のために駆け上がった場所がどこにあるかを探す学生が多く見られた。

### 3. フィールドワーク中の学習

フィールドワークの3泊4日の概要を整理すると以下のとおりとなる。本報告では主として2021年12月17日から20日までの実習をもとに述べるが、夏季休暇中に実施していたフィールドワークで扱ったプログラムについても適宜取り上げる。なお、2021年度のフィールドワークに参加したのは、3年生50人と引率教員2人の計52人であった。

#### 3-1. 1日目

南三陸町までの交通手段は大学発のバスとなる。休憩時間を含めて片道6時間程度かかる。宿泊は南三陸町内にある宿泊研修施設「いりやど」を利用する。

「いりやど」は大正大学が震災直後から南三陸町でボランティア活動を行っていたことを契機に、大正大学の支援により設立された宿泊研修施設となる。

##### (1) 旧大川小学校震災遺構の訪問

南三陸町に向かう途中で、宮城県石巻市にある「石巻市震災遺構大川小学校」を訪問した。大川小学校は津波により児童70名が死亡し、4名が行方不明となった場所である。フィールドワークは南三陸町での学びとなるが、東日本大震災は東北・関東の太平洋沿岸が被害に遭い、南三陸町以外での被害も学ぶ必要がある。また南三陸町内には一般見学できる震災遺構がほとんどない。旧大川小学校震災遺構が2021年7月から一般公開されていることもあり、2021年のフィールドワークで訪問することにした。津波の被害を受けた校舎が残されているため校舎の見学とともに、震災前後の写真等のパネルや資料を展示する展示室もあり、学生たちは各自のペースで見学した(図3・図4)。津波の襲来までおよそ50分の時間があつたことから、避難のあり方を含め学校側の対応が問題視され裁判にもなっていることを学び、津波の恐ろしさはもちろんであるが、防災意識や危機管理への対応を考える学びにつなげるよう試みた。



図3 旧大川小学校震災遺構を見学する学生 (2021年12月17日筆者撮影)



図4 資料室を見学する学生 (2021年12月17日筆者撮影)

## (2) 被災者の方の講話

「いりやど」到着後に夕飯を終えてから、南三陸町内の被災者の方から震災当時の状況、復興の課題、今後のまちづくりのあり方等について1時間～1時間半程度伺うプログラムを設定した。2019年度までは佐藤秀昭氏、2021年度は工藤泰彦氏から話を伺った。二人とも震災当時は防災庁舎の付近に住んでいたことから、翌日見学する防災庁舎周辺の震災前の様子を知ることができた。前者の佐藤氏は震災前の写真を多く所有している(和合・佐藤, 2012)ことから、現在とは全く異なる町の様子を写真で見ることができた(図5)。後者の工藤氏は避難の様子やその後の復興の状況を詳細に語る中で、現在の南三陸町の「人の命を守るまちづくり」の意義についても話をし、学生たちが翌日から南三陸町での学びやまち歩きをする上での理解を深めることができた(図6)。



図5 佐藤秀昭氏の講話の様子 (2015年9月18日筆者撮影)



図6 工藤泰彦氏の講話の様子 (2021年12月17日筆者撮影)

### (3) その他のプログラム（中尊寺訪問）

2019 年度までは南三陸町に向かう中で、岩手県平泉町の中尊寺を訪問していた。中尊寺は震災当時支援物資の拠点施設にもなっていたこと、また大正大学の設立宗派の 1 つである天台宗の寺院であることもあり、震災当時の話だけでなく、大正大学での学びについても講話いただいていた（図 7）。また中尊寺は世界文化遺産に登録されていることもあり、学生たちが日本の代表的な歴史文化を学ぶ機会にもなった（図 8）。



図 7 中尊寺での講話の様子  
(2018 年 9 月 12 日筆者撮影)



図 8 中尊寺内を見学する学生の様子  
(2018 年 9 月 12 日筆者撮影)

### 3-2. 2 日目

#### (1) 被災者の方の講話と町内見学

2 日目の午前中は、元消防士であり、震災直後に南三陸消防署副署長となった佐藤誠悦氏に震災当時の被害の様子について話をしていただき、併せて防災庁舎や旧戸倉中学校を佐藤氏の案内で見学した（図 9・図 10）。佐藤氏ご自身は震災当時気仙沼消防署の指揮隊長であり、当時の震災被害の状況、そして奥さんを津波で亡くしている（佐藤, 2021）ことから、その思いについてもお話いただく。大切な家族を亡くされた思いは痛切であり、例年学生たちに大変深い印象を与えた。佐藤氏の話は震災被害の恐ろしさだけでなく、日常生活がいかにかけがえないものであるか、そして非常時にどのように判断すればいいのか、防災意識を高める機会にもなった。また当時の消防の様子は大変過酷であり、現在でも



PTSD に悩む消防士が多いことも知ることとなった。人間環境学科では卒業後に消防士の道に進む学生が例年複数人いる。彼らにとって、南三陸町でのフィールドワーク、中でも佐藤氏にお話を伺うことは意義深い機会となった。

町内の見学では、防災庁舎と事前学習で学んだ旧戸倉中学校を訪問した。2021年時点では防災庁舎周辺（図 11）は震災復興祈念公園となっており、南三陸町の市街地を襲った津波の高さとされる 16.5m の高さもわかる場所として整備されている。旧戸倉中学校は現在公民館となっている。震災後は旧校庭に仮設住宅もあったが、現在は撤去されている。ここを津波が襲ったことは学生たちにとっても感慨深い印象を与えた（図 12）。



図 9 佐藤誠悦氏の講話の様子  
(2021年12月18日筆者撮影)



図 10 佐藤誠悦氏の案内を聞く学生の様子  
(2021年12月18日筆者撮影)



図 11 防災庁舎周辺の様子  
(2021年12月20日筆者撮影)



図 12 戸倉公民館の震災により止まった時計  
(2021年12月20日筆者撮影)



## (2) Yes 工房の見学・体験

2日目午後は、「いりやど」から歩いて10分弱のところにあるYes工房を見学した。震災復興として、地域資源である木材の加工を活かした工房である。工房の代表である大森丈広氏から工房および南三陸町の森林・林業の現状についてお話を伺い、工房内も見学させていただいた(図13)。併せて、スギの枝をつかったスプーン・フォーク作り体験に取り組んだ(図14)。作業を通じて、森林資源の活用を学ぶことにつながった。



図13 Yes 工房内の見学の様子  
(2021年12月20日筆者撮影)



図14 スプーン・フォーク作り体験の様子  
(2021年12月20日筆者撮影)

## (3) 例年のフィールドワークで取り入れているプログラム(漁船体験・荒島訪問)

漁船体験(金毘羅丸)では、約10人ずつ漁船に乗り(図15)、志津川湾内でのホタテの養殖現場を見学し、実際にその場でホタテを食べるという貴重な体験を組み入れた。また、この漁船体験だけでなく、荒島を訪問するというプログラムを取り入れた年もあった。荒島(図16)は、志津川湾内にある小さな島であり、落葉広葉樹林、常緑樹林(タブノキ)、針葉樹林(スギ)という3種類の森がある。私有地であるが貴重な自然が残されていて、南三陸町の自然を学ぶことのできる場所である。



図 15 漁船体験の様子  
(2018年9月13日筆者撮影)



図 16 荒島全体の様子  
(2018年9月14日筆者撮影)

南三陸町は海に恵まれた地域である。暖流と寒流が混ざり合い、沿岸（リアス式海岸）には多様な自然環境が広がり、さまざまな生物が生息している。志津川湾を囲むように山が位置し、町の境界と分水嶺がほぼ一致している。2018年には、志津川湾がラムサール条約湿地に登録された。雨が森の恵みであるミネラル分を含んで川を通じて海に注ぎ、志津川湾の豊かな生態系を支える一因となっている。そのため、震災からの復興を考える上で、「森・里・川・海」のつながりを考え、南三陸町の恵まれた自然資源を活用すること、具体的にいえば、前述のYes工房のような森林資源の活用や水産資源の振興が重要となる。

#### (4) グループワーク

2日目の夜は、翌日の志津川地区でのまち歩きに備えて、グループごとにどのようなテーマでどこを歩くのかを検討し、報告する作業を行った<sup>3)</sup>。

### 3-3. 3日目

#### (1) グループに分かれてのまち歩き

3日目は午前中から午後にかけて、グループに分かれて志津川地区でまち歩きを行った(図17・図18)。解散・集合場所は、「さんさん商店街」とし、昼食は、2021年ではグループ毎に町内の店舗で各自とることとした。まち歩きの際のチェックポイントとしては、防災庁舎、高野会館、復興住宅、上山八幡宮とするが、それ以外はグループで話し合っ行ってみたいところを設定した。2021年のフィー

ルドワークでは、ワイナリーを見学したグループもあった。まち歩きの際に町民の方々と話をする機会があれば、失礼のないように話を伺うように指導した。



図 17 まち歩きの様子①  
(2015年9月19日筆者撮影)



図 18 まち歩きの様子②  
(2021年12月19日筆者撮影)

## (2) グループワーク

3日目夕方から夜は、上述のまち歩きをふまえて、各グループがどのような学びを得たのかを翌日の報告会で発表する準備作業を行った(図19)。まち歩きで得た思いを自分たちで撮影した写真とともに整理する作業をグループ毎に進め、町民の方々に話を伺った場合にはその内容もふまえて、PowerPointにまとめていった。消灯時間が0時であるため、それまでには完成させる作業となるが、「東京に戻ってから自分たちに何ができるのか?」を深夜まで真剣に議論するグループもあった(図20)。



図 19 グループワークの様子①  
(2016年8月2日筆者撮影)



図 20 グループワークの様子②  
(2021年12月19日筆者撮影)

#### 3-4. 4日目

報告会は午前中を使い「いりやど」の研修室で行った。2021年のフィールドワークでは10のグループに分かれ、以下のタイトルで報告を行った。各グループ6〜7分程度の発表であるが、まち歩きを通じて南三陸町の魅力を認識し、大学や自宅に戻ってからも家族や友人にその魅力を伝えたいと話すグループ、防災庁舎といった震災遺構の役割を改めて考えたグループ、防災の備えをどのように進めていくのかを行政・住民のそれぞれの視点から考察するグループ等さまざまであった。また、南三陸町の防災対策だけではなく、学生自身が居住する自治体の防災対策について考察するグループもあった(図21・図22)。

- ・「災害に強い街づくり」とはなにか
- ・10年後の南三陸を歩く～私達の見た被災地～
- ・南三陸町を歩いて
- ・震災から10年経った南三陸で気づき感じたこと
- ・志津川町で歩いて感じたこと
- ・あゆみ続ける町
- ・南三陸フィールドワーク3日目
- ・志津川地区の歩みと足跡
- ・南三陸じゅうの魅力とつながるワイナリー
- ・防災意識を改める街歩き

報告会の最後には、教員からは、これからの人生の中でもう一度南三陸町を訪問してほしいことを伝えた。「フィールドワークⅡ」の中で見て感じて考えた光景が、再訪時にどのように変わっているのか／変わっていないのかを自分の目で確認して考えてほしい、という願いを話して、閉会とした（図 23）。

報告会の後は、「さんさん商店街」で各自昼食をとり、また物産なども購入しバスにて大学へと帰路についた。



図 21 報告会の様子①  
(2021年12月20日筆者撮影)



図 22 報告会の様子②  
(2021年12月20日筆者撮影)



図 23 「いりやど」前での集合写真  
(2021年12月20日筆者撮影、撮影時のみマスクを外している)



#### 4. 事後学習

例年事後学習として大きく2つのプログラムに取り組んできた。1つは報告書の作成である。1人2500字程度で、フィールドワークを通じて何を見つけ、考えたかについての個人レポートを執筆し提出させた。インターネット等で調べるのではなく、3泊4日のフィールドワークで自分は何を考えたのかについて、学生自身の考えを自分の言葉でまとめるというのが趣旨である。報告書はとりまとめて年度末までに発行した。

もう1つは、フィールドワークでの学びやフィールドワークを通じて考えたことを、例年11月に開催されていた「大正大学学園祭」と12月に東京のビッグサイトで開催される「エコプロダクツ展」にパネル形式で出展し、来場者にプレゼンをすることであった(図24・図25)。

これらの事後学習は、学んだことをアウトプットする学習として位置づけ、学生たちがフィールドワークで得た思いを言語化することで、整理し、学生たち自身の文章表現力やコミュニケーション力の醸成にもつながるよう留意したものである。



図24 大正大学学園祭での展示の様子  
(2016年11月5日筆者撮影)



図25 エコプロダクツ展での様子  
(2018年12月7日筆者撮影)

#### 5. まとめ

人間環境学科では4年生の卒業時に学科での学びに関するアンケート調査を



実施している。満足度の高い学習内容が4年間の中で何であったのかを尋ねる項目については、アンケート調査を開始した2018年度以降、いずれの年度で最も多く選ばれているのがこの南三陸町でのフィールドワークとなった。また、前述の4日目の報告会の最後に「もう一度南三陸町を訪れてほしい」という話をすることで、これまで複数人の学生がプライベートで南三陸町を再度訪問したとの報告も卒業後に寄せられて来ているし、卒業旅行で仲間と再び訪問したという報告もあった。

このように南三陸町でのフィールドワークが学生にとって満足度の高い学習プログラムであるが、その背景として以下の3点が考えられる。

1つ目としては、学習テーマが明確であったことが挙げられる。つまりこのプログラムは、東日本大震災からの復興状況を現地で学ぶものであるという明確さがある。例えば2021年のフィールドワークに参加した学生たちは震災当時小学校4年生～5年生であり、震災当時の記憶が曖昧である。そして、南三陸町内の様子も震災から10年が経過し、当然ながら映像学習で学ぶような震災直後の景色ではないため、学習意欲を現地で保つことに懸念もあったが、実際にフィールドワーク中の学生たちの学習意欲は高く、防災意識も高まった。その理由としては、防災庁舎、そして今年度は旧大川小学校も訪問し、津波の被害が残された光景を間近で見たことの影響は大きいと考えられる。このような震災遺構は、震災について考える学習姿勢を高める役割を担っているといえる。震災遺構についてはその存続に市民の中に賛否があるというが、震災当時の記憶が曖昧、あるいは知らない世代が今後増えていく中で一定の役割があることが示唆される。

2つ目としては、事前学習にしっかりと取り組んできたことが挙げられる。『希望の地図』の視写と映像学習を通じて、東日本大震災がどのような被害を与えたのか、それは物理的な被害だけではなく、精神的な被害を含めた社会的な被害について学ぶ機会となった。事前学習をしっかりと取り組んでいるからこそ、現地でのフィールドワークが3泊4日であったにもかかわらず、学生たちの学習意欲や防災意識を高めることができたと思われる。

3つ目としては、講話いただく方々や「いりやど」の職員の方々を含めた南三陸町の方々の温かさである。事前学習では震災のいわば負の部分の学んできたが、それはややもすれば南三陸町という地域自体に「被災地」というネガティブな印

象を付与してしまうことにもなる。しかしフィールドワークを通じて、現地の人々の温かさに触れることで、南三陸町に対してポジティブな印象へと変わっていくことが伺える。森林資源や水産資源が豊富で、自然豊かな南三陸町の魅力を発見することで、再度南三陸町を訪問したいという希望につながっていくといえる。

以上をふまえて整理すると、震災をテーマにした南三陸町でのフィールドワークについては、2021年の段階でもはや震災から10年が経過しているものの、やはり現地での学びが重要である、ということを改めて認識できた。東日本大震災に関連しては、『希望の地図』や映像学習「ラジオ」や「証言記録」のようにさまざまな学びの題材がある。またインターネットで動画を検索すれば、当時の様子を映像で視聴することもできる。だからこそ事前学習がしっかり取り組めるわけであるが、その一方で現地を訪問しなくても学ぶことができるという指摘ももちろん可能である。しかしこれまで南三陸町でのフィールドワークを実施してきた経験からいえば、やはり現地を訪問することが最も理解を深めることにつながる学習だといえる。それを考える上で1つの事例を本報告の最後に紹介したい。

2018年に芥川賞候補となった北条裕子氏の『美しい顔』をめぐる騒動についてである。この小説は、東日本大震災を題材としながら被災地を訪問したことがないにもかかわらず、その表現力が高く評価され、芥川賞候補となったのだが、石井光太氏の『遺体 震災、津波の果てに』をはじめとする震災関連の書籍から無断引用があったと批判され、騒動となった。結果として『美しい顔』は芥川賞を受賞しなかったが、単に参考にした書籍を参考文献として明記していなかっただけでなく、現地を訪問することの重要性を改めて考えさせられる事例である。例えば、石井氏の『遺体』を出版する新潮社は北条氏、『美しい顔』を出版する講談社に以下の意見を出している（以下、新潮社HPより一部抜粋）。

「ノンフィクション作品が小説執筆時などに参考とされることはこれまでも多々あったでしょうし、これからもあることかと思えます。しかしながら、それらノンフィクション作品は、単に事実を羅列しただけのものではありません。その一行一行を埋めるため、足を使い、汗を流して事実を掘り起し、みずからの感性で取り上げるべき事実を切り出し、みずからの表現で懸命に紡いだ、かけがえのない創作物です。

ノンフィクション作品が様々な創作物の参考となることは、ある意味光栄なことではあります。しかし参考文献として作品巻末などに記したとしても、それを参考にした結果の表現は、元のノンフィクション作品に類似した類のものではなく、それぞれの作家の独自の表現でなされるのがあるべき姿ではないでしょうか。

それぞれの作品を必死に紡いだ著者の努力に思いを馳せていただき、敬意をもって接して頂ければ幸いです。」

同じく無断引用された『3.11 慟哭の記録』の著者である金菱清氏も騒動について以下のように述べている（(以下、新曜社 HP より一部抜粋））。

「たとえ震災を直接的に語らなくても、そこから震災について十二分に示唆に富んだものを与えてくれる小説は少なくない。つまり、あえて小説の中で震災を仔細に描写しなくても震災を語りうると私は考えている。したがって、被災地に入るかどうかももはや関係ない。ただ現実的には、7年経った今でも行方不明の方がいて、たとえ1%でも生きていることを日々願って帰りを待っている家族がいる。

そしていまだ手を合わせることもできない人がいる。語れない人がいる。現場では当事者性すらが奪われているのである。その生々しさを抱えたまま、薄皮一枚でかろうじて繋がり未だ傷の癒えない人々にとって、否応なく小説の舞台設定のためにだけ震災が使われた本作品は、倫理上の繋がり（当事者／非当事者の溝）を縮めるどころか、逆に震災への『倫理的想像力』を大きく蹂躪したのだと私は述べておきたい。その意味において罪深いのである。」

北条氏の作品をめぐる騒動は単に引用の問題だけではなく、「被災地とどう関わるのか？」という問題提起がある。北条氏が「舞台設定」として被災地をある意味「利用」したとしても、執筆にあたり被災地を訪問していれば、作品はもっと違ったものになっていたのではないだろうか。この投げかけはフィールドワークを終えた学生たちがこの騒動について考えを問われた際に出てきたものである。

筆者のうち本田は、担当する講義科目「社会調査法」の最終試験の問いとして、この騒動について考えを問うという問題を出してきた。講義では調査倫理に関連して、北条氏の騒動を取り上げるが、南三陸町でのフィールドワークに関連させた説明はしない。しかし学生たちはフィールドワークで南三陸を訪問した意義を自分たちの言葉でしっかりと答案に書く。先ほどの「執筆にあたり被災地を訪問していれば・・・」という投げかけは多くの学生が答案に書いたものとなる。彼らが南三陸町を訪れたことの意義を自覚していることが伺える。「社会調査法」は、3年生科目であり、従来であれば2年生で南三陸町を訪れてからおよそ1年後となるが、答案の文章からは、南三陸町での体験や考えたことは薄れていないことが感じられる。

もちろん現地を訪問したから、現地の状況をすべて理解できるわけではない。しかし、学生たちの多くは、まち歩きで話を伺えた町民の方々について、震災前や震災直後の町の様子は話をたくさんしてくれるが、今現在の話になると言葉が少なくなり、言葉に詰まっている、という気づきを報告する。復興に向けてさまざまな振興の取り組みがなされているが、その言葉にならない思いを私たちはどのように向き合うのか、ということは、被災地から離れている学生にとって重要な気づきである。このように、現地を訪問するというのは、現地を理解する、もしくは理解しようとする上での第一歩であり、学生たちはフィールドワークでの学びを入口にして、社会のあり方を考える学びに深化させていくことができるようになるのである。

人間環境学科は改組されて、このカリキュラムも廃止となってしまったので、現状の履修プログラム上では学生たちを引率して南三陸町を訪れることは残念ながらできなくなった。しかし震災から10年が経過した現在でも現地を訪問する意義があるということを2021年度のフィールドワークでも改めて確認できた。

フィールドワークを通じて南三陸町を訪れたこれまでの学生たち(卒業生たち)、そして私たち教員は、今後も南三陸町で得たさまざまな思いとどう向き合うのか、その問いと答えの試行錯誤は今後も続くことになり、その作業には各自で取り組んでいくことになるが、それは東日本大震災を経験した私たちの課題であるともいえる。

## 付記

南三陸町でのフィールドワークでは、「いりやど」の阿部忠義館長をはじめとする現地の皆様の多大なご協力の下で実施してることができました。厚く御礼申し上げます。また、フィールドワークの実施にあたってこれまでご尽力いただいた大正大学の関係する各部署の皆様にも感謝申し上げます。

## 注

- 1) 人間環境学科内では、環境コミュニティコース（後に環境政策コース）だけでなく、こどもコミュニティコース（後にこども文化・ビジネスコース）においても南三陸町でのフィールドワークに取り組んできたが、本報告では環境コミュニティコース当時から取り組んできた南三陸町でのフィールドワークに焦点を当てる。
- 2) 2021年のフィールドワークの実施では、新型コロナウイルスの感染対策として、希望する学生には大学でのワクチン接種を7月以降に実施、出発前には全員を対象にしたPCR検査の実施、フィールドワーク中は飲食時以外のマスク着用を徹底した。
- 3) このフィールドワーク開始した当初は、紙の地図を配って検討させていたが、近年はスマートフォンといった学生自身の個人デバイスで地図を確認できるようになったことは隔世の感がある。

## 文献

池田久美子 (2011) 『シリーズ「大学の授業実践」3 視写の教育—〈からだ〉に読み書きさせる』東信堂.

佐藤誠悦 (2021) 『≪東日本大震災 10 年の思い≫ 亡き妻に捧げるラブレター』三陸印刷株式会社.

和合亮一・佐藤秀昭 (2012) 『私とあなた ここに生まれて』明石書店.

## Web サイト

新潮社 「『群像』8月号、『美しい顔』に関する告知文掲載に関して」

<https://www.shinchosha.co.jp/news/article/1317/>

情報取得日：2022年1月6日

新曜社通信 「『美しい顔』に寄せて一罪深いということについて 東北学院大学金菱清」

<https://shin-yo-sha.cocolog-nifty.com/blog/2018/07/post-4c87.html>

情報取得日：2022年1月6日

宮城県南三陸町 「東日本大震災による被害の状況について」

<https://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/17,181,21.html>

情報取得日：2022年1月8日